

新型コロナウイルスの感染拡大が収まらない中、各種メディアで「コロナ禍」という言葉がよく使われている。感染拡大によつて引き起こされた災難や不幸、経済的・社会的影響を意味し、小学館による「大辞泉」が選ぶ新語大賞二〇二〇で次点に選ばれた。だが、個人的にこの言葉が嫌いだ。

「禍」という文字はしめすへんで構成されている。しめすへんは、神に捧げ物を置く台の象形とされ、「神」「祈」「社」のように神様にまつわる文字に多く使われる。禍という文字も、神様によつてもたらされた災いという意味が隠されているように感じる。しかし、新型コロナウイルスによつてもたらされた災難や社会的・経済的影響は、避けようもなかった「天災」だろうか。

過去にも世界でペストや赤痢、コレラといった疫病が大流行し、多くの命が失われた歴史がある。新型コロナウイルスも感染拡大を完全に防ぐことは難しかったであろうと思う。しかし、かつての疫病と異なり、医学が発展した現代では、感染源がウイルスであることが早期に判明し、人との接触を抑えれば感染拡大を抑制することも分かっていった。日本にウイルスの侵入を許し、感染拡大させてしまったのは、政府の初期対応が甘かったからではないか。

また、国内では感染拡大を防ぐため、政

コロナは「禍」か

府が国民に外出・移動の自粛や飲食店に対する酒類提供の自粛などを要請。これによつて国内経済は冷え込み、仕事を失ったり収入が急減したりして、生活に困窮する人が続出した。しかし、政府や地方自治体が十分な支援策を用意できていれば、こうした「社会的・経済的影響」もここまで深刻化しなかったのではないか。

八月八日に閉幕した東京五輪を巡り、菅義偉首相は「感染拡大につながっているという考え方はしていない」と言い切った。確かに、五輪関係者の中で確認された感染者は一部に限られ、多くの競技が無観客で実施されたことで、感染拡大の直接的な引き金にはならなかったかもしれない。しかし、夏休み期間中に五輪が開催されたことで、多くの国民が「オリンピックだつてやっているんだから、外出してもいいだろう」と思つてしまい、人の流れを生み出してしまったのではないか。現に、札幌で開催された競歩やマラソンの沿道には観客が押し寄せてしまった。

「最悪の事態を想定して備える」ことが防災の基本とされる。しかし、今回の五輪を巡る政府の対応はどうだろう。専門家が人流の増加で感染者数が急増すると予測していたのにもかかわらず、五輪開催に踏み切った。五輪の開幕直前になって東京都な

どに対する緊急事態宣言の期間を延長したが、自粛疲れや宣言慣れでその効果が薄れていることは目に見えて明らかだった。

専門家の予想通り、八月一日には東京都で五七七三人、全国で計二万三六五人といずれも過去最多の感染者数が確認された。八月二四日にはパラリンピックが始まることもあり、今後さらに感染者が増え、医療が逼迫するのではないかと気をもんでいる。

政府は「ワクチン頼み」一本槍で押し通すつもりのようなだが、そのワクチンでさえ、各自治体に今後の供給量の見通しが伝えられず、いつになったら一二歳以上の国民全員に二回の接種を終えることができるのか見通しが立っていない。菅首相は「一二月までの早い時期に、ワクチン接種を希望するすべての方の接種を終えたい」としているが、目標を語るばかりで実務が追いついていないというのが現状だろう。

感染対策は後手後手で、医療現場は逼迫し、生活困窮者に対する支援も足りない。これはもはや人災だ。それにもかかわらず「コロナ禍」という言葉が流布することで、政府や自治体が「天から降ってきた災いであろうしようもなかった」と言い逃れをする口実を与えてしまうような気がしてならない。

八魚